【播磨病院内科疾患情報 No.41】

血　便、下　血

胃腸に病気があると、そこから出血してくる事があります。食道・胃などの口に近い部分からの出血では、血液が変性して、黒い色の便になることが多いとされています。反対に、小腸・大腸の疾患であれば、「赤い」血液の性状を保ったまま、肛門から排出されてきます。

目に見えないような少ない血液を見つけようというのが、大腸癌検診で行われている便潜血検査です。この検査では大腸癌やポリープのない方も陽性になりますし、反面大腸癌でも陰性ということもあります。検査が陽性であれば、大腸癌の危険性ありと認識して、大腸内視鏡検査を受ける必要があります。また、近親者に大腸癌の方がおられる場合には40歳を過ぎれば、便の異常に関わらず大腸内視鏡検査を受けるほうが望ましいと考えられています。

さて、このような目に見えないような血液もあるのですが、実際には目で見えるような場合もあります。下血、血便といった表現が用いられますが、いずれにしても肛門から血液が排出され、その奥のどこかに病気があるはずです。

頻度として多いものは以下のようなものがあります。

痔疾：肛門部の病変を広くこう呼びますが、肛門裂傷(切れ痔)、痔核（いぼ痔)、痔瘻（あな痔）などいろいろな疾患を含んでいます。肛門部の痛みを伴うものや多量の出血をきたすものもあります。きちんとした診断の上で対処法を決めていかないといけない病気です。当院では外科で診断・治療を行っています。

感染性胃腸炎：様々なばい菌が胃腸炎を起こす原因になりますが、病原性大腸菌(O-157はこれに含まれる)をはじめ、キャンピロバクター、アメーバなどの頻度が高いです。胃腸炎ですので下痢に血液が混ざってくるのですが、高熱や強い腹痛のあるものは重症度が高いと考えられます。

炎症性腸疾患：主に若年の方に起こってくる原因不明の疾患。潰瘍性大腸炎、クローン病がこれにあたります。多くの場合には腹痛や発熱を伴ってきます。

虚血性腸炎：急に左側あるいは下腹部に痛みが出現し、出血をきたします。主に左側の大腸が区域性に炎症を起こしてくる疾患です。中高年の方が多いのですが、若い方でも時々お見受けします。

大腸腫瘍：大腸癌や一部のポリープでは、その表面がもろく、出血をきたします。かなり巨大になるないしは進行するまでは自覚症状に乏しいのが特徴です。中高年の方であれば、大腸癌の頻度が高いですし、若年の方では良性腫瘍の頻度が高いです。

このほかにも様々な疾患で出血はおこってきます。いずれの疾患であっても、出血があるということはどこかの臓器の表面が損傷している事は間違いありません。出血が続くと貧血になってくる事もありますし、便に血液がついているあるいはトイレットペーパーに血液がついているといった事に気がつかれた場合には、早めに医療機関を受診してください。必ずしも内視鏡検査が必要というわけではありませんが、必要があれば、緊急内視鏡で診断・治療を行っていきます。また、発熱や強い腹痛を伴っている場合には、生命に関わる重症の場合がありますので、これに限っては救急での受診が必要ですので、ご注意下さい。

（文責　大西　裕）

【播磨病院内科疾患情報のバックナンバーは播磨病院のホームページ
http://www.harima-hp.jp/main.htm からご覧いただけます。】